

明学キリスト教週間（「平和を実現する人」）説教

説教 2015/10/19 岩井健作

主題聖句「平和を実現する人々は、幸いであるである。その人たちは神の子と呼ばれる」

（マタイ5：9）

題 「国に剣を取らせてはならない」

今年の横浜校舎のキリスト教週間の主題聖句は「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」です。

これは、聖書の中のイエスの言葉です。イエスは平和についてもう一つ大事な言葉を残しています。しかも具体的な言葉です。「剣を取る者は皆、剣で滅びる」という教えです。当時の権力者祭司長の手下がイエスを殺そうと思って、逮捕しにやってきた時、イエスと一緒にいた者がイエスを助けようと思ってか、剣を抜いて、その手下の役人の耳を切り落としました。その時、いわれた言葉です（マタイ福音書26章52節）。

日本が近代国家として開国した明治以来「富国強兵」が国のスローガンでした。「金」と「剣に象徴される軍隊」にもものを言わせる国の政策が取られてきました。そして、「剣を取るものは皆、剣で滅びる」という言葉通りに、70年前太平洋戦争に破れて、日本は破綻しました。結果、新しい国の在り方として策定されたものが日本国憲法です。もう国は剣を（すなわち軍隊を）持たないということを決めた憲法第9条が宝でした。第9条があるが故に平和憲法と言われてきました。しかし、強引にその解釈を変更し、「戦争が出来る国」を目指してきたのが日本の戦後の保守政治です。自衛隊という名の軍隊が創設されました。遂には、とうとう今の安倍内閣は集団的自衛権行使を実現するその関連法案を国会で強引に強行採決してしまいました。

市民、民衆の多くの人が反対の叫びと行動を繰り返して広げてきました。皆さん学生たちのシールズ（自由と民主主義のための学生緊急行動）が、声を枯して抗議をしたこと。奥田愛基（あき）くんが参議院特別委員会公述人として意見を述べたこと、牛田悦正（うしだ・よしまさ）君がその後で自民党議員をにらんでいたことなどは新聞で報じられました。こう言う形で民主主義と平和が踏みにじられてゆく事を本当に悔しい思いです。

私は、太平洋戦争が終わった時当時の国民学校の6年生でした。戦時中は牧師の家なものですから学校ではキリスト教は敵国の宗教だと言って、いじめに近い扱いを受けた事もあります。戦後「新しい憲法」を学び、70年間、その都度の問題に取り組んで、特に米軍基地の撤去運動、沖縄への連帯を通じて平和に取り組んで来ました。だから、こんどの安倍内閣の暴挙には心底からの憤りを覚えます。しかし、闘いはこれからだと思っています。

牛田君は「デモで社会は変わった。参加する一人一人に主権者の意識が生まれた。」と述べています。主権者としての自覚こそが、これからの権力者の暴走に歯止めをかける力となると信じています。閉塞状況にあっても道を切り開いてゆきましょう。

「剣を取るものは剣で滅びる」という言葉を生きて「非暴力」で、世の中の変革に尽くした人を3人挙げろと言われれば、私は、インドのマハト・ガンジー、そしてアメリカのルーサーキング牧師、そしてもう一人は、日本の沖縄の阿波根昌鴻（あわごんしょうこう）さんを挙げたいと思います。阿波根昌鴻さんの事は余り知られていないと思います。1901年、沖縄の本部町で生まれ17歳で基督教の洗礼をうけて、伊江島で結婚し、キューバとペルーに移民でわたり、帰国後伊江島で土地を開拓し、デンマーク式農民学校を企画し建設中に沖縄戦でひとり息子の死と共に全てのものを失いました。戦後は伊江島の土地の6割が米軍基地として強制接收された際に、米軍と真っ向から向き合って非暴力を標榜して村に人々と土地闘争を先頭に立って闘った人です。後その闘いの記録を集めて自宅に反戦地主資料館「ヌチドゥタカラの家」を建設し、戦争の愚かさと平和の尊さを説き続けた人です。岩波新書に『米軍と農民』『命こそ宝（ヌチドゥタカラ）』そして自費出版の『人間の住んでいる島-沖縄・伊江島土地闘争の記録』[写真集]を残しておられます。阿波根昌鴻さんは2002年101歳で亡くなりました。まだ御元気の時、もう40年程前に、私は、沖縄の伊江島に阿波根昌鴻さんをお訪ねしました。いろいろお話を伺い、米軍のブルトローザの前に村の人たちが座り込んだ場所に参りました。村の土地を米軍に明け渡さなかったその場所に記念の碑が立っていました。そこに「剣を取るものは剣にて滅ぶ」と聖書の言葉が書かれていました。そして、村の人たちが申し合わせた陳情規定が資料館にはありません。「反米的にならないこと。怒ったり悪口を言わないこと。耳よりも上に手を上げないこと（米軍はわれわれが手を上げると暴力をふるったと言って写真を撮る）。米軍を決して畏れない。人間性においては、生産者であるわれわれ農民の方が軍人に優っている自覚を堅持し破壊者である軍人を教導く心構えが大切であること。11項目を「規定」として村の人たちが署名をして守ったと話されました。農民が軍人に優る、ということに大変感銘しました。

阿波根昌鴻さんの非暴力の闘い方はその後の沖縄での基地闘争の原点になっています。その非暴力は聖書のイエスの教えに基づいています。今、辺野古では新基地をつくらせない闘いが続けられています。基地をつくらせないことは「国に剣を取らせない」事です。

私もない何度か辺野古に行きました。本土の人たちの辺野古への関心は低いと言われていました。沖縄の翁長知事は国に剣を取らせない、すなわち辺野古に基地はつくらせない闘

いの先頭に立っています。

私たちは、今平和を願うならば、沖縄に関心を持ち、力を尽くして応援したいと思います。阿波根昌鴻さんは聖書の教えを本当に生きた人です。私たちも、そのあとに続きたいと思います。

お祈りをします。神さま、今日は明治学院大学のキリスト教週間です。私たちの国は、今、平和から一歩も二歩も遠ざかりました。しかし、今こそひとりひとりが主権者として目覚め責任をもって自分なりの反戦平和の闘いをしてゆくことができますように。私たちを御導きください。この祈りをイエスの名によって祈ります。